べる　きっず

No.4　令和６年 6月28日

すずか幼稚園
第２すずかきしおか幼稚園

七夕(たなばた)　飾り付け

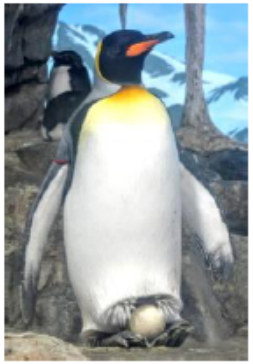
本園では、毎年７月７日の七夕の日を前に、園に大きな笹(実際は竹)を立てています。その笹には、園児たちが七夕飾りを付けたり、短冊に願い事を書いたり絵を描いたりしてつるしたりします。
本年度も、６月26日(水)に、第２すずかきしおか幼稚園の山の竹藪から通園バスの運転手さんたちが竹を切り出してくれました。その竹を両幼稚園に運び込み、園児たちが飾りつけをしました。

飾り付けた竹は、すずか幼稚園は園舎の外柱に２本立て、第２すずかきしおか幼稚園では玄関前の柱に２本立てました。
飾りつけをする際には、心の中でお願い事をしながら飾っている様子が伺えました。年年少組や年少組の子どもたちには、飾りつけをつけるのは少し難しく、先生と一緒に頑張ってつけていました。
両幼稚園で飾り付けた竹は、７月７日の七夕の夜を終えるまで園に立てて置く予定です。保護者の皆様も、幼稚園の近くを通りかかられた際にはご覧になってください。

「七夕」は、織姫と彦星の伝説で有名な中国の「乞巧奠(きっこうでん)」という風習と、日本で古来から行われてきた裁縫や書道など手習い事の上達を願う「棚機(たなばた)」という風習が合わさったものだと言われています。
現在はさまざまな願い事を書く短冊ですが、昔は手習い事の上達を願う風習だったため「字がきれいになりますように」という願いを込めながら短冊を書き、神様に願いが届きますようにという祈りを込めて神聖な笹に短冊や飾りをつるしていました。
それが現代まで受け継がれて「七夕」という行事になっています。

のまず食わずで卵を抱くペンギンのオス

フンボルトペンギンやケープペンギンは、ほら穴とか、あるいは石ころを集めて巣をつくり、その中に卵を産んで抱卵するのだが、王様ペンギンや皇帝ペンギンなど南極にいる大型のペンギンは、卵を一個生むと、その卵を自分の足の甲の上に乗せて、かえすのである。南極というのは、雪と氷に閉ざされた世界だから、卵を抱く場所がない。足の甲の上だけが、安全で確かな抱卵場所などだ。ところで、手のないペンギンがどうやって卵を足に乗せられるのか、不思議に思われるかもしれない。
これは、観察する人がだれでも感心するのだが、実に器用に乗せている。まず卵をくちばしで爪先のところまでころころ転がす。ペンギンの足のゆびは非常に長くできているので、その足の甲の先のほうで卵を持ち上げ、それを足の根元にまで転がして乗せるのだ。さらにおなかの下のほうには、毛があまりなく、たくさんの血管が集まっていて暖かい、まるで座ぶとんのような抱卵斑(ほうらんはん)があって、それをぺたっと卵の上にかぶせ、足との間にはさんで、卵を温めるわけである。
そんなわけで、ペンギンは、卵を足の上に乗せている限り、敵がきたからといって逃げ出すわけにはいかない。また、風が冷たいからといって、岩かげに隠れることもできない。卵を抱いたら最後、それがかえるまで動けないのである。



皇帝ペンギンの場合は非常に変わっていて、卵を産むのはもちろんメスであるが、オスがメスの前にいて、卵を産むのをじっと見ている。メスが苦労のあげく卵を産むと、その卵をメスがくちばしでコロコロ転がしていき、それを父親であるオスが、自分の足の上に乗せる。おもしろいことに、ペンギンの卵は鈍端(どんたん)と鋭端(えいたん)が、平面的に見ると三角形といえるほど極端に差があるのだ。まん丸の卵だったら、あのぶきっちょなペンギンがいくら見張っていても、ころころと転がってしまってとても追いつけない。けれども、円錐形の卵なら、転がっても鋭端のほうを中心にして回るだけで遠くへは行かない。
その卵をオスが自分の足の上に乗せて、座ぶとんのような抱卵斑をかぶせ、じっとたっているわけである。南極は、零下二十度から零下四十度にもなる極寒の地で、しかものすごいブリザードが吹きまくる。その中で、卵を抱いたまま、微動だにしないで立っている。寒さに耐えなければならず、水ものめない、餌も食べられない。
さて一方、卵をオスに預けたメスは、その場所を離れて、海岸のほうに歩いていく。そして海に達して、そこで魚をおなかいっぱい食べるのである。その間、約六十日。のまず食わずで立ちっぱなしの父親の体重は、三分の一も減ってしまうという。こうして疲労困憊(こんぱい)しきったころにヒナがかえるのである。
これまた不思議な話なのだが、それがどうしてわかるのか、ヒナがかかえる直前に、母親がおなかいっぱい食べて太って帰ってくる。そして、かえったヒナは母親が預かり、やせおとろえた父親が今度は餌を食べに海に出ていくのだ。母親は、たらふく食べて胃袋の中に詰め込んできた餌をヒナに与えて育てていく。
ペンギンの交代抱卵はきわめて顕著な例であるが、このように交代でヒナを育てるのは、鳥には非常に多いのである。
（元上野動物園長　中川志郎　著「パンダは舐(な)めて子を育てる」より抜粋）